

# 琉球大学学術リポジトリ

はしがき：更なる教育改善のために

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学大学教育センター 公開日: 2018-07-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 仲地, 弘善 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/42126">http://hdl.handle.net/20.500.12000/42126</a>

# はしがき — 更なる教育改善のために

大学教育センター長 仲地弘善

大学改革の中核は教育改革であると言われるように、研究体制とともに教育改革に向けた組織作りと個々の教員の教育に向ける意識改革が今まで以上に重要になっている。1991年に設置基準の大綱化が実施されて以降、琉球大学においても教養部解消に伴う新カリキュラムの編成、シラバスの提示、学生による授業評価の実施、そしてFD活動の展開など、いわゆる“Plan, Do, and See”の改革・改善のサイクルを意識した組織的取り組みが始められているが、今のところトップダウン的色彩が強く、ボトムアップ的組織作りにまでは至っていない。表面には現れてこない個々の教員の日常的な教育活動の実体を把握しデータベース化して組織的な教育改善に活かしていく教育支援体制が求められている。

大学教育センターでは2001年3月に自主的に外部評価を実施し、その成果を『琉球大学大学教育センター報』第5号（2001年10月）で公表している。更なる教育改善に向けて第一歩を踏み出したのであるが、その第5号の「巻頭言」で前センター長が指摘しているように、「琉球大学を卓越した教育拠点に」していくためには大学教育センターの組織・機能を一層強化していく必要がある。また、学内の個々の教員たちからの教育改善に向けた「騒然たる」議論が巻き起こり、「大学改革の在り方」について大学が内発的にゆずられる必要があることも確かである。

そのような認識の下で、『大学教育センター報』6号（2002年3月）では過去1年間の大学教育センターの活動報告をするとともに、大学教育に対する意見や提言、個々の教員の日常的な教育実践報告、及び大学教育センターの組織運営に関する提言なども掲載している。センター報に学内の多様な声を掲載することで、センター報が学内の

「教育の広場」としての役割を果たし、大学教育センターが主体となるFD活動展開に活力を注入してほしいものだ。

最近よく耳にする言葉だが、FD活動とはいったい何だろうか？

大学セミナー・ハウス編『続／大学は変わる』（国際書院、1995）によれば、「広義の概念としてのFD活動は、①大学の自己評価機能の開発、②個人と組織の研究機能の開発、③個人と組織の教育機能の開発（大学教員研修）、④教員人直納の適正化の実現（大学教員評価）、⑤管理運営機能（マネジメント能力）の開発をカバーする。しかし、狭義には個人と組織の教育機能の開発（大学教員研修）と見なされることが多い」（146）、と定義されている。つまり、私たちが普通に口にしてしているFD活動とは教員の教育者としての資質向上の営みであり、個々の教員としてはかりでなく、教科集団として教員の資質向上に取り組む活動なのである。

先日、メディアセンターと京都大学高等教育開発研究センターが主催するSCSによる公開研究（又は実験）授業のFDが行われたが、琉球大学も生涯学習教育研究センターに設置されているSCS施設を通してそのFDに参加した。約15名ほどの教員が参加し、17参加大学の公開研究授業の現状と課題について熱心に耳を傾けていた。主催者を代表して京都大学の田中毎実教授は、「公開研究授業のFD活動は、第2段階に入っている」と指摘していた。このSCSを通してのFD活動を展開することで、全国のマップづくりができ、自分の大学がどのような現状にあるかが確認できる筈だと指摘している。

個々の教員の潜在的な教育改善への取り組みを教科集団の各教員が共有し、大学全般の教育改善に繋げていく、いわゆる「ボトムアップ的方法」

と、全国の大学で今展開されているFD活動の成果を「トップダウン方式」で学内に紹介し、しかるべき委員会での審議を踏まえた上で実施していく方法とが車の両輪のようにうまく噛み合って回転していくことになれば、琉球大学の諸々の教育改善も順調に推し進められていくであろう。そして琉球大学が「卓越した教育拠点」として全国的に認知される日も近いであろう。

例えば、共通英語の教科集団では、先進的なカリキュラム改革を行っている大学へ調査・研究に出向いたり、英語教育の改革を行っている大学から講師を招聘してシンポジウムを開催したりして教養英語の改善に向けた取り組みを展開している。5年計画で実施されているこのFD活動展開は、共通英語の教科集団だけでなく、琉球大学の大学教

育センターにおける他の教科集団のFD活動にもよい刺激を与える筈であり、授業改善に向けた確かなる第一歩を踏み出したと言える。

大学教育センターは「ボトムアップ的方式で立ち上がってくる授業改善に向けたFD活動の取り組みを調査し、データベース化し、教育支援体制の確立を図っていききたい。同時にまた、更なる教育改革・改善に向けての組織的なFD活動を一層活発に展開していきたい。カリキュラムの見直し、「学生による授業評価」の活用法の点検、組織の充実・強化など、大学教育センターが抱えている課題は多いのだが、とりわけFD活動の展開を図ることで更なる教育改善に向けて日常的に、“Plan, Do, and See”という改革・改善サイクルを実施していく所存である。